

追悼 山口巖先生

言語学者山口巖先生

李 長波

言語学者としての山口巖先生の言語研究の全般についてはおろか、その部分について語る資格も、筆者にはない。それを承知で、拙文を草することになったのは、大学院時代は学生として先生のご講筵の末席を汚し、先生が京都大学大学院を退職されるまでの最後の一年間（平成9年度）は、文化環境言語基礎論講座で助手として、公私の両方にわたって、先生のご警咳に接する幸いに恵まれたことへの、責任を痛感したためにほかならない。拙文が公的な資料に基づいて、大学院人間・環境学研究科における山口巖先生のご研究、大学院教育の一端を記録することとし、私事にわたることを一切省いたゆえんである。

『京都大学百年史』【部局史編】第13章「人間・環境学研究科」には、基幹講座(当時)「文化環境言語基礎論」の次の内容の紹介が載っている。

3. 文化環境言語基礎論講座(基幹講座)

本講座は、個々の言語の基礎的な構造とそれをを用いる社会的文化的な創造活動との関係について、その動的様相の解明を目指して研究を行っている。

山口巖教授は、文化環境言語基礎論を担当し、言語と認識の問題、言語の機能と形式の問題の研究を行っている。このため言語の現象をどのように考え、扱うかを、現象学的な観点、機能主義的・構造主義的な観点から考究しようとしている。特に、最近は、内容的類型学の重要性に注目しつつある。(p.601-602)

これは恐らく山口巖先生の手書かれた講座の研究内容とご自分の研究紹介と思われる。ここには、言語学者としての山口巖先生の言語研究の基本姿勢と到達点がはっきり示され、わけでも、現象学と内容的類型学の二つのキーワードは、山口巖先生の言語研究の奥深さと幅広さを象徴していると見てよいように思う。

基幹講座(当時)「文化環境言語基礎論」の講座主任、大学院担当教授としての山口巖先生は、以下の科目を担当されていたことは、大学院人間・環境学研究科作成の冊子によって確認することができる。

○H5・H6 年度（大学院博士前期課程）

【研究指導分野】文化環境言語基礎論

【授業科目名】自然・文化言語基礎論（演習を含む）

【授業科目の内容】

言語の機能という観点から、言語構造の多様性と普遍性、修得と運用、表現手段の潜在的可能性、民族文化との関連などを論じる。

●H7・H8・H9 年度（大学院博士前期課程・博士後期課程）

【研究指導分野】文化環境言語基礎論

【授業科目名】

（博士後期課程）文化環境学系環境言語基礎論特別演習

自然・文化言語基礎論 I・II

（博士前期課程）自然・文化言語基礎論（演習を含む）

【授業科目の内容】上におなじ

以上の担当科目紹介に、【教官の研究紹介】が続く。

山口 巖 自然・文化言語基礎論：

ヴィルヘルム・フォン・フンボルト、デ・クルテネ、ド・ソシュールを経てブラーグ学派へと発展する機能主義的な考えに基づきながら、言語史、文法論、意味論などに関わる研究を行ってきた。今後もこの流れを主軸にしなが、広く、言語文化についても、考えていきたい。(H5～H9 は 同じ文章)

一見して、先に引用した『京都大学百年史』【部局編】の講座紹介との間に、キーワードの違いが目立つものの、人名のキーワードを中心に、山口先生の大学院での講義（同演習）は、言語哲学・言語学研究史に裏打ちされた、言語史、文法論・意味論を総合した、機能主義言語学の、基本から到達目標を明らかに示したとともに、二十世紀言語学史への俯瞰的な視野をもって展開された内容であった。そのスケールの大きさは、先生のご講筵の末席を汚した一人として、今に記憶に新しいところである。これらの講義と演習において、言語史、言語の構造・言語の論理を究明するための文法

論・意味論、そして、第三の極としては言語哲学・言語学史という、山口巖先生の言語研究の三本柱ともいうべき、三つの研究領域、そしてこの三者を有機的に三位一体とした、山口言語学の集大成であった。

それは、1995年から1999年の山口巖先生の著書の表題と内容からもはっきりと読み取れる。

1. 『類型学序説: ロシア・ソヴェト言語研究の貢献』(京都大学出版会、1995.10)
2. 『ことばの構造とことばの論理』(退官記念論文集)の発行(1998.7)
3. 『パロールの復権: ロシア・フォルマリズムからプラーグ言語美学へ』(ゆまに書房、1999.11)

ちなみに、20世紀最後の年に刊行された、『パロールの復権: ロシア・フォルマリズムからプラーグ言語美学へ』の帯には、「20世紀言語学の歴史的検証」、「ロシア・フォルマリズムからプラーグ言語学派の業績を歴史的に検証。いわゆる「ソシユール以後」の学説を系統立てて解説、「ポスト構造主義」の真の意味を探る。」とあるのは、決して宣伝のための美辞麗句ではなく、読者に、山口言語学の意義を明瞭に解き明かすための適切な誘いの言葉であった。これが、山口巖先生の文化環境言語基礎論講座主任教授ご在任中の講義内容とその間に公刊された先生のご著書から、筆者が垣間見た山口言語学のイメージである。

言語学者山口巖先生の京都大学大学院でのお仕事を語るのに、忘れてならないのは、講座紀要 *Dynamis* の創刊である。講座関係者の発表の場として10号まで刊行が続いた *Dynamis* には、創刊号から「泉井久之助博士著書論文目録」が掲載され、後に改訂を重ねた結果、泉井久之助先生生誕百年記念会編『泉井久之助博士著書論文目録』の刊行を見るに至ったこと、そして、言語学者山口巖先生が主唱して、関係者のご尽力で盛大に行われた「泉井久之助先生生誕百年記念会」(2005年)の開催を実現させたこと、は特筆に値する。これら一連の活動によって、泉井言語学から山口言語学へ、という、二十世紀日本における言語研究の歴史に歴然たる軌跡を名実ともに画したと同時に、二十一世紀以降の言語研究に大きな展望を開かせてくださったのである。

言語学者山口巖先生に、先生の学生、文化環境言語基礎論講座の元助手として、心からの感謝を捧げたい。